

二つの答

岸田國士

青空文庫

仏蘭西の演劇聯盟乃至劇研究団体について何か書けといふ御註
 文ですが、御承知の通り、仏蘭西人は、頗る社交的ソシアブルであると同
 時に、極めて自立的アンデパンダンで、社会的交際ソシエテは盛んであるが、組織アツソン
アシヨン的団体を作ることはあまり好まない。大きな欠点とも云へるで
 せうが、そこにまた、民族的文化的特質があると思ひます。

大阪演劇聯盟の組織や事業については、僕はまだよく研究して
 をりませんが、これに類するものが、独逸や亜米利加に——従つ
 て日本に発達する可能を以てをることも亦民族的特質——従つて
 欠陥の半面を語るやうに思へます。

僕は滞仏中、劇場はもとより、色々な芸術的団体に接近する機

会も少くありませんでしたが、少数の「先駆芸術団体」を除いては、一般公衆の、言ひ換へれば、アマトウール素人の「芸術研究団体」といふものがあるのを聞きませんでした。所謂素人劇団は沢山あります。然しそれは、所謂劇壇なるものと全く没交渉で、金などを取れば、それこそ人が見には行きません。

それならば、公衆は演劇鑑賞の標準を何によつて定めるかと云へば、たゞ個人的趣味によつてと云ふより仕方ありません。勿論、専門の劇評家は毎興行の初日に、筆を揃へて各新聞の劇評欄を賑はせます。之を見て、どの劇場に行かうとか、今度は面白さうだとかいふ、つまり観劇の動機を与へ、その方向を決定することもあるでせう。然し、やつぱりその人その人の教養、趣味によ

つて、劇場を選び結果を評価する以外に、そしてそれが屢々輿論を作る以外に、他動的な、又は団体的観劇組織といふやうなものは全く無いと云へます。

それなら、仏蘭西の公衆は、何れも劇芸術の何ものたるかを解し、優れた作品を翫味する能力があるかと聞かれ、ば、即座に然りと答へることが出来ないにしても、「否」と答へることは、少くとも、その比例に於いて躊躇しないわけに行きません。たゞ「芝居に行くのは、楽しみに行くのだ」「感心はしても、くつろいだ気持ちになれないものは、われわれは御免だ」さういふ人は沢山ある。幸なことに、仏蘭西には色々な意味でゞはありますが「面白くない芝居」といふものがない。低級な——芸術的には——

―芝居を見に行つても腹の立つやうなことは滅多にない。気の毒になるやうなことはない。安心して芝居が観れる。これだけは有難い。

演劇講演会は、時々あります。劇場が主催することもあり、コンフェランシヤの如き講演機関が主催することもあり、また学校が主催することもある。然し聴衆は固より一定してゐません。

演劇に関する研究雑誌、研究書籍が極めて少く、殆ど無いと云つてもいいのは、兎に角、仏蘭西の公衆が、演劇に冷淡な為めではなく、又専門家が不親切な為めでもなく、仏蘭西人は一番「芸術は学問でない」ことを心得てゐるからでせう。それよりも、

「理窟を云はなければ芸術がわからないと思つてゐる」連中が割合に少いからでせう。

無名作家の劇的作品募集といふやうなことも、近頃、「既成作家」の一部が集つてやつてゐますが、また新劇団体の一つが、それをやつたことがあります。素人が集まつてそんなことをやつてゐる様子はありません。

それよりも、一時、批評家の間で「無名作家撲滅会」といふものを組織してはどうだといふやうな議論さへありました。それは猫にも杓子にも脚本が書けると思ふ弊風——どこでも同じと見えます——を一掃する為めだといふのです。これは結局、不幸な文芸落伍者を少くするといふ意味で、有意義な社会事業だといふも

のもありました。つまり無名作家の作品を募集して、一々、それに対する意見を述べ「そんなもの」を書く不心得を諭してやるのです。そして、「そんなもの」を書く暇に手職でも覚えることを勧告してやるのです。どうです。大阪演劇聯盟でも、さういふことをおやりになつては。

第二に、日本の芝居についての感想をといふ御註文ですが、これは、どうも、あまり芝居を見に行かず、殊に日本の劇壇の事情に疎い僕にとつて、甚だ危険な問題かも知れません。見当違ひを平気で云ひさうな気がします。若し変なことを云つたら、どうか、読者諸君の御叱正を願ひます。殊に大阪のことは、全く不案内で

すから、次に述べることは、東京だけのことゝ思つていただきませぬ。

先づ、旧劇は、あのまゝ、そつとして置きませう。僕はちつとも不満がありません。西洋人にはわからないところなど、大にいゝと思ひます。

次に新派劇ですが、これは何んとかしたいものです。僕は、脚本がつまらないから殆ど見に行きませんが、所謂俳優の芸としては、新派劇、決して軽視すべきではないと思つてゐます。それ処か、新劇などゝいふ「いかもの」を無暗にかつぎ上げるかはりに、新派劇が今迄開拓した、磨き上げた、ほんたうに「物になつてゐる部分」を、そのまゝ、これからの芝居に取り入れて、「明日の

演劇」を作るやうにしたいと思つてゐます。

新派の脚本といふものは實際ひどい。馬鹿馬鹿しい。通俗劇でもいゝから、せめて、ほんたうの感動を与へてほしい。それでも見物は見に行きます。それは、つまり新劇といふやつが、一層「面白くない」からでせう。

新劇はなぜつまらないか。これは、役者らしい役者、言葉がわかるければ、役者と云へる役者がゐないからでせう。それでゐて、徒らに「六ヶ敷いもの」を演^やりたがる。「深刻めいたもの」をやりたがる。「非戯曲的な戯曲」をかまはずに舞台にかける。見物の迷惑此の上なしではありませんか。翻訳劇と云へば、すぐに、イプセン、ストリンドベリイ、……ゲオルグ・カイザー……です

か。創作劇と云へば何は扱て置き……いや、こいつは、あとにしませう。

処で、これも日本人の悪い癖ですが、総て仕事を甘く見る。人がやる、すぐに自分にも出来ると思ふ。やつて見るとうまく行かない。あゝおれは駄目だ、死んでしまはう。一寸お待ちなさい。あんた、なかなかうまいぢやありませんか。さうかしら、ひやかしちやいけません。ひやかしやしません。あんたぐらゐにいけば、どこへ出ても恥かしくない。ほんたうですか。ほんたうですとも。早い話が、あんたゞけの××をもつてゐるものは、そんなにたんとはありませんよ。まあ、もう一度、やつて御覧なさい。うむ、うまいうまい。見込があるでせうか。なに、そんなに有名になら

なくつてもいゝんです。え、もう新聞に出てみましたか。やつぱり、人がゐないんですね。私、今度、かういふことをやつて見ようと思ふんですがね……

女学校で歌を作ること習ふ。歌人にならうと思ふ。ヴァイオリンを習ひ出した。舞台で着る裳模様が目に浮ぶ。作文が得意だ。原稿用紙に自分の名前を刷り込ませる。校友会の余興劇で主人公を演つた。『俳優表情論』を書いて『×劇×誌』に送りつける。

「黒白」を弁ぜざるも甚しいではありませんか。

よく人が云ふことではあるが、素人劇といふものが存在し得るだけに、芝居の「玄人」にはなりにくい。然し、現在の日本には、現代劇を演ずる為めの「玄人」が欲しいのです。現代劇を書く為

めの「玄人」が、もつとあつてもいゝのです。現代日本の劇作家中、二三人を除いては、みな「玄人面をした素人」だと断言して憚りません。

素人なら、素人らしい芝居を見せて貰ひたい。そこからだんだん、「現在の玄人には無いもの」が生れて来るのも事実です。然し、それが為めには、玄人のやらないこと、玄人では出来ないことをやつて欲しい。今の日本の現代劇が面白くないのは、素人劇だからと云ふだけではない。素人が玄人の真似をしてゐるからです。

新劇の俳優に玄人と云へるものがないと云つて置きながら、玄人の真似とは如何、かういふ反問に答へることは、頗る容易です。

これは、新劇の開拓者が、西洋の真似をした。真似の出来るところだけ真似をした。主に表面だけ、形式だけ、言ひ換へれば、半分だけ真似をした。内容と本質は、即ち残りの半分は、在来の芝居、又は間に合せの芸当でお茶を濁した。在来の芝居からは、比較的下らないものを随分取り入れてゐる。無意識的に取り入れてゐる。之等の新劇の開拓者の功労は、勿論認めなければなりません。また、色々な事情で、さういふ人達の理想は実現されなかつたでせう。然し、兎に角小成に安んじた——と云つて悪ければ——あんまり早く玄人のやうなつもりになつてしまつたのです。

そんなら、どこまでが素人で、どこからが玄人か、そんな馬鹿なことを尋ねる人もありますまいが、それはつまり、修業の程度

にあると云ふより外はありません。

「玄人の芸は型にはまつてゐていけない」。これは新芸術愛好者のよく口にする文句です。僕も、そのうちに、さういふことを云ひ出すかも知れません。たゞ、今のところ、日本に現代劇と云はるべき「殆ど完成した」芸術的演劇がまだその形を成してゐないことは、何と云つても心細い。

そこで僕は、前にも云つたやうに、素人劇団でもいゝから、もつと「面白い芝居」を見せる工夫をして貰ひたいのです。それには危なかしくつてもいゝから變に固苦しくない、重苦しくない、かさかさ、或ははじめじめしない、馬鹿馬鹿しくてもいゝから朗らかな、氣取らない、大胆な、然し、常に聡明な、趣味の優れた作

品を選んで、よく稽古を積んで、金なんか取らないで見せるくらの覚悟でかゝつて貰ひたいのです。

さういふものゝ中から、やがて、ほんたうのものが生れて来るかもわかりません。

要するに、歌舞伎劇以外に、「面白い芝居」が出て欲しい。われわれの芝居をもちたい。これが僕の現在の願ひです。

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集19」岩波書店

1989（平成元）年12月8日発行

底本の親本：「我等の劇場」新潮社

1926（大正15）年4月24日発行

初出：「舞台評論（大阪演劇連盟機関雑誌）第四十一号（十月号）」

1924（大正13）年9月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2009年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

二つの答

岸田國士

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>